様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３９０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０４６２

研究課題名（和文）反語彙主義モデルに基づく形態-統語関係の実証的研究

研究課題名（英文）Empirical Studies on the Morpho-syntactic Relationship Based on the Anti-lexicalism Model

研究代表者
森田　順也（MORITA, Junya）

金城学院大学・文学部・教授

研究者番号：２０２００４２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、英語の種々の名詞化表現を規則的に生成するメカニズムを明らかにすることによって、形態的機構の仕組み及び統語的機構との相互関係を解明することにある。日英語の名詞派生語及び複合語に関する広範な事実観察に基づき、両言語の共通点・相違点を分類した上で、名詞化システムの妥当なモデルを提案する。①「適正に分配された語形成」のモデル―各タイプの意味的・形態的・統語的情報は各々の関連した文法モジュールに最適に分配される、②「動的語形成理論」―統語的・談話的環境で複雑語を生産的に作る創造的語形成は、形態統語的操作の制限を緩和し形態論的可能性を拡大させる。

研究成果の概要（英文）：　The aim of this study is to reveal the morphological mechanism and its relation to syntactic mechanism by showing the system which regularly generates a variety of English and Japanese nominals. After classifying the similarities and differences of English and Japanese nominal derivatives and compounds based on extensive observation of them, I have proposed relevant models on the nominal system: ① the model of “well-distributed word formation,” which optimally distributes each type of semantic, morphological, and syntactic information to each relevant grammatical module, and ② a “dynamic model of word formation,” which holds that creative word formation which productively coins complex words in syntactic/discursive environments may relax restrictions on morphosyntactic operations to expand morphological potential.

研究分野：形態論

キーワード：名詞化　hapax　創造性　反語彙主義　分散形態論

１．研究開始当初の背景

形態的情報と統語的情報の相互作用の仕組みに関する研究は、生成理論の研究で重要な分野を占めている。とりわけ、「派生語や複合語といった複雑語は文法のどのレベルで作られるか」という難題に、従来多くの研究者が取り組んできた。この課題に対するこれまでの提案は、①語形成はすべて語彙部門で行われると主張する「語彙主義」と、②主要な語形成プロセスは統語部門で行われるとする「反語彙主義」に大別される。本研究者は、過去十数年間に渡って②の立場から英語の複雑語の諸特徴を明らかにし、関連する理論的分析を提案してきた。提案した分析をさらに発展させるためには、英語の複雑語の新たな側面の解明と、対応する日本語の仕組みの解明が求められている。

２．研究の目的

本研究は、子供による言語の獲得、とりわけ語彙の獲得の説明―子供が短期間に大量の語を獲得できるのはなぜか―を最終目標として、日英語の名詞化現象に焦点を当てて、そのメカニズムを明らかにするものである。提示されるメカニズムは、広範なデータと新たな手法を用いて統計的に実証される。本提案は、語彙部門で利用可能な情報、及び形態‐統語の相互関係を厳しく制約するものである故に、子供が短期間に語彙を獲得することを可能にする言語能力の解明に重要な寄与をなすことができる。

３．研究の方法

下記①-③の調査によって名詞化の創造的・普遍的側面を浮き彫りにするとともに、④の調査によって名詞化の多様性を示す。①大規模コーパスに見出される日英語の名詞形 hapax legomenon―ある資料で１度のみ用いられる語―を調査することによって、名詞化表現の創造的な側面を明らかにする。②収集された日英語の名詞化の語形を精査することにより、語形決定の規則性を明らかにする。③名詞化に関する日英語の句の包摂―語の内部に句が生起すること―及び「語の内部要素と外部要素の結合」の事例を収集・分析することによって、名詞化の主要なプロセスは、談話的文脈に依存して統語機構で行われることを示す。④日英語の句の包摂及び語境界を越えた要素間の結合が、どのような場合可能か、形態統語的、意味機能的、音韻的決定要因を調査した後で、日英語の共通点及び相違点を洗い出し、それらの根源を説明する。

４．研究成果

本研究の主要な研究成果として、本研究と密接に関わる４つの論文を公表し、併せて本研究と関連する１つの論文および２つの研究発表を公表した。各研究の骨子は以下の通りである。

(1)“A Syntactic-Morphological Analysis of Nominal Compounds”

本稿の目的は、統語論と形態論の最適なバランスと相互作用を追究することにある。具体的には、大規模コーパスから摘出される英語の総合複合語の統語的・形態的特性を明らかにした後で、同特性群を統一的に説明するために分散形態論に基づく「適正に分配された語形成」のモデルを提案した。例えば、総合複合語 claw removal の派生は次のようになる。統語的 merge によって統語構造 $[_{DP}$ $[_{LP}$ l[event] $[_{NumP}$ Num[pl] l[entity]]]]が形成される。この構造は形態部門に送られて、①「D 補部の環境にある l 節点は N として実現される」という一般的条件に従って範疇が指定され、②「root に nominalizer が付加される」という形態素付加が行われ、③関連する語彙挿入、④線的順序の決定―英語の統語論では主要部は最初に現れるが、形態論では最後に現れる―によって、構造 $[_{DP}$ $[_{NP}$ $[_{N1}$ √remove nom[-al]$[_{NumP}$ Num[-s] $[_{N2}$ √claw nom[-∅]]]]]が構築される。この構造に、2 種類の形態的 merger―N2 と Num の merger 及び Num と N1 の merger―が適用されて、構造$[_{DP}$ $[_{NP}$ $[_{N3}$ $[_{Num}$ $[_{N2}$ √claw nom[-∅]] Num[-s]]$[_{N1}$ √remove nom[-al]]]]]が構築される。最後に、パレメター化された形態条件―X^0 内の要素に機能範疇は存在しない―に従って、Num（[pl]）が削除される。このように、本モデルでは、総合複合語形成に関する意味情報、形態統語的情報、及び語加工関連情報が、各々の関連するモジュールに最適に分散される。

(2)「Postsyntactic Compound―先行分析とその問題点」及び「Postsyntactic Compound の分析―構文拡張的見方―」

第一論文において、Shibatani and Kageyama (1988)等が明らかにした日本語の postsyntactic compound（統語論の後で作られる複合語）の特性を整理し、その問題点・課題を示すことによって 、語形成と他の部門、とりわけ統語論との関係はどうあるべきかを論じた。次に第二論文において、postsyntactic compound の語彙・統語的二面的特質を一般化し、その根源を統一的に説明した。議論のエッセンスは、以下の通りである。節構造（彼が宮田旅館を経営の折）から、モデル（$[混雑\text{-}緩和]_N$）にならって S 構造複合語（$[宮田旅館：経営]_{V/N}$）が派生的に生成される。同複合語は、格助詞の排除等の語彙的属性群をモデルから自然に引き継ぐ一方で、前項の構造条件等の統語的属性群を基体の統語構造から無理なく継承する。出力の範疇は、基体形とモデルの双方の属性を受け継いだ動詞と名詞の中間範疇となる（cf. ?航空面から$[比島：攻略]_{V/N}$の折）。さらに 3 種類の新たな構文の広がりが観察される。即ち、形式‐意味の乖離解消が原動力となって前

項に特定の句がはめ込まれ（[日本の分担金：要求]）、潜在項の顕在化が動因となって新たに数種の項が付加され（[アルゼンチン：[利払い：不履行]）、そして前項が多義的な複合語（[ボランティア団体：加入]）を手本にして、着点項（[未開拓地域：進出]）や場所を表す項的付加詞が前項に生起可能になる。このように、範疇の混成、句の包摂、語における機能範疇の出現等の多彩な「変則」表現の背景には、構文展開の法則が存在し、これが各習得段階で新種の規則を導入する。

(3)“Contextually-Motivated Word Formation: Complex Words That Rise in the Comparison and Contrast of Separate Entities or Processes”

本研究では、反語彙主義への経験的証拠を与えるために、文脈に関係づけられた語形成の特性群を提示した。議論のエッセンスは、以下の通りである。本研究は、“you could not just make and unmake people at will”に見るように、比較・対照文脈における創造的語形成を研究するものである。創造的語形成の強い表示器である、大規模コーパスのhapax legomena―頻度１の語―に焦点を絞って、関連する英語のhapax－①un-/de-/re-/-(a)(t)ion形の事象動詞・名詞、②-er/-ee形の実在名詞、③-ity/-ness/-able/-lessで終わる状態名詞・形容詞―が、British National Corpusから抽出される。加えて、日本語の「-者」形の実在名詞及び「-さ」形の状態名詞が、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」から抽出される。抽出されたhapaxは、形態的、統語的、及び意味的観点から詳細に分析される。分析の結果、次の２点が明らかにされる。第一に、比較・対照という統語的文脈での即座の語構築は、多様な刷新的派生語と複合語を生み出し、それ故に統語的語形成の主張が支持される。例えば“she got up but he came with her, his arms around her, push-walking her gently ...”という文において、等位項の“his arms around her”という行為に助力されて、別の等位項の“walking her by pushing”という行為が、新複合語push-walkによって簡潔に表現されている。第二に、文脈的に誘発される語創造によって生成される刷新語は、一連の形態的・意味的制約の緩和を促進する。例えば“since that has been deforested and thus dipigged (de-everythinged, in fact) ...”の文において、通常、名詞と結びつく接頭辞de-が、一連のde-派生語のネットワークの中で代名詞everythingと結びつくに至っている。

(4)“Some Creative Aspects of Nominalization: An Analysis of Hapax Legomena in English”

本稿の目的は、大規模コーパスから摘出される名詞のhapaxを広範に分析することによって、名詞化の創造的側面を明らかにすることにある。具体的にはhapaxの名詞表現の内的・外的構造を詳述した後で、両構造が語用論的機能と密接に関係することを例証した。当該名詞表現の内的構造と語用論的機能の例として、内部構造型(Det) + derived N (*(the) destruction*)が「談話の結束性」と密接に関係する点を指摘できる。同パターンでは、解釈のために補部を取り戻さねばならない故に、主要部名詞はその情報を自然と先行文脈に求めることになる。名詞表現の外的構造と語用論的機能の例として、当該表現が「主語」という外的構造型で使用される頻度がもっとも高いこと（cf. Why is eye-closure so important?）が挙げられる。これは、談話の結束性を実現するために、当該名詞表現を主語に据えて先行素材と前方照応的な関係を確立するためである。

(5)関連研究

①「語の内部に見られるコロケーション：形態素間の共起関係とメンタルレキシコン」

本稿の目的は、形態素間の親近性にどのような規則性が認められるか、そしてそのことが語形成やメンタルレキシコンの構成にどのような影響を与えるかを明らかにすることにある。具体的には、-ity及び-nessがどのような基体形の形容詞に付加するかを、大規模コーパスBritish National Corpusを駆使して詳細に調査を行った。その結果、形態素の結合条件により、特定の接尾辞で終わる形容詞の名詞形をレキシコンにリストする必要がなくなることが明らかになった。例えば、X-able/-al形にはほぼ独占的に-ityが付くので、同形容詞の名詞形（e.g. fusibility、conditionality）をリストする必要はない。次に、阻止の条件―ある形の存在が競合する形の出現を禁じる―が名詞形の記載を減らす。対応する-ity形に阻止されるので、*fusibleness/*conditionalness類の語が不適格であることを個々に記載する必要がなくなる。こうして、接辞間の共起関係と阻止の原理により関連する語形が規則的に決定され、簡潔なレキシコンへと導かれることを提示した。

②「語形成パターンの 生産性：BYU-BNC hapaxによる検証」

本発表の目的は、大規模コーパスから摘出されるhapaxに基づき各種の語形成型の生産値を測定し、その理論的含意を示すことにある。生産値の計算法を提案した後で、５種類の名詞形成接辞-ation/-al/-ment/-ity/-ness、４種類の形容詞形成接辞-al/-less/-ic/-ical、及び３種類の動詞形成接辞-ize/-ify/-ateが、計20種類の基体形（X-ize/X-ifyなど）に関してどの程度生産的かを数値化した。その結果、「競合する接辞の生産値の比較によって、自動的に接辞が決まる部

類と一方が優先される部類があること」及び「単純語への接辞付加は生産的でない」ことが明らかになり、「競合により複雑語の語形が生産的に加工される」という仮説を基本的に裏付ける証拠が得られた。

③ “Morphological Study and Its Implications for Language Education”
本発表では、形態的研究が言語教育と密接に関係づけられることを例証した。具体的には、大規模コーパスの hapax を分析することによって、語形成の創造的・機能的側面―簡潔性、脱焦点化、結束性―及び各種の形態論的原理―基体条件、阻止、右側主要部、第一姉妹、領域サイズ制約―を実証した後で、形態メカニズムの理解が、学習者の語彙及びライティングの技術を向上させることを、各種の具体的な練習問題を提示しながら例解した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
① 森田順也 “Contextually-Motivated Word Formation: Complex Words That Rise in the Comparison and Contrast of Separate Entities or Processes,” *Estudos Linguísticos/ Linguistic Studies* 10, 2017 査読有（掲載確定）
② 森田順也 “A Syntactic-Morphological Analysis of Nominal Compounds,” *Florida Linguistics Papers* 3, 1-12, 2016 査読有
③ 森田順也 “Some Creative Aspects of Nominalization: An Analysis of Hapax Legomena in English”『金城学院大学論集（人文科学編）』第 12 巻 2 号, 72-81, 2016 査読無
④ 森田順也 「Postsyntactic Compound ―先行分析とその問題点」『金城学院大学論集(人文科学編)』第 11 巻 2 号, 101-111, 2015 査読無
⑤ 森田順也 「語の内部に見られるコロケーション：形態素間の共起関係とメンタルレキシコン」 日本英文学会『第 86 回大会 Proceedings』214-215, 2014 査読有

〔学会発表〕（計４件）
① 森田順也 “A Syntactic-Morphological Analysis of Nominal Compounds," 2016 年 3 月 10 日, 3rd Florida Yearly Linguistics Meeting, Florida International University, Florida, USA
② 森田順也 “Contextually-Motivated Word Formation: Complex Words That Rise in the Comparison and Contrast of Separate Entries or Processes,” 2015 年 7 月 3 日, 4th International Conference on Grammar and Text, Universidade Nova de Lisboa, Portugal
③ 森田順也「語形成パターンの生産性：BYU-BNC hapax による検証」 2014 年 10 月 4 日, 英語コーパス学会第 40 回大会, 熊本学園大学, 熊本市
④ 森田順也 “Morphological Study and Its Implications for Language Education,” 2nd International Conference on Linguistics, Literature and Cultural Studies in Modern Languages, 2014 年 9 月 11 日, Universidad Católica de Murcia, Spain

〔図書〕（計１件）
① 森田順也 「Postsyntactic Compound の分析―構文拡張的見方―」『現代の形態論と音声学・音韻論の視点と論点』 西原哲雄・田中真一（編）, 総 316 ページ, 開拓社, 42-60, 2015 査読有

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
森田　順也（MORITA, Junya）
金城学院大学・文学部・教授
研究者番号：20200420

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)